

曲目解説

Preludio Sinfonico (交響的前奏曲)

Ugo Bottacchiari (ウーゴ・ボッタキアリ) 作曲

作者は 1879 年 3 月 10 日イタリア・マチェラータのカステルライモンドに生まれ、1944 年逝ったイタリアの作曲家。郷土に近いベザロのロッシーニ音楽院でマスカーニの教えを受け、卒業後作曲活動に専念し、数度の作曲コンクールに入賞して金牌を受けた。オーケストラ曲、吹奏楽曲、室内楽曲、声楽曲があるが、中でもジェノバ市に捧げられた四楽章の交響樂はもっとも有名である。名声を高めたのは 20 歳の時に作曲したオペラ『影』で 1899 年郷土マチェラータのロッシ劇場に於いて初演され大成功を収めたと言う。マンドリン界では本曲以外に詩的小夜曲『夢！うつつ！』詩的幻想曲『イル・ヴォート』晩年の傑作『夢の魅惑』等、内容の深い作品で一級の作曲家として認められていた。本曲は、1915 年「イル・コンチェルト」誌が数あるコンクール受賞曲中、特にこの曲のみ「偉大なる」の文字を冠して出版したもので、円熟期の頂点を示す作品として広く知られ演奏されている。冒頭の Largo Appassionato は「ゆったりと、情熱をもって」という意味で情熱的な感情が全曲を貫いている。この主題に比べて副主題は悲しく、切なく感傷的である。2 のモチーフは絡み合いながら、時には悲しそうに、時には望郷の想いを馳せて、そしてクライマックスでは確信に満ちあふれ勇壮に響きわたる。そして潮がひく様に静まっていった後の沈黙は何とも言えないものがある。

全体に響き渡る繊細なトレモロは「天上の響き」と言っても過言ではない。まさにマンドリン合奏の最高傑作と言えよう。福岡シンフォニックマンドリンアンサンブルとしては、第 17 回定期演奏会(1984.10.27)以来の再演である。

Seconda Piccola Suite (第二小組曲 作品 18)

Giulio de Micheli (ジュリオ・デ・ミケーリ) 作曲

中野 二郎 編曲

作者は 1889 年にイタリア北部のリグリア州ラ・スペツィアで生まれた作曲家でヴァイオリニスト。5 歳の頃からヴァイオリンを学び、15 歳で学位を取得後、パルマのポイト音楽院に移りロメ・フランツォーニ氏に師事した。5 年後には最高の成績で教授の資格をとったが、そのまま音楽院に残り、イターロ・アッツォーニ氏に師事して対位法を学んだ。26 歳の時にブリュッセル のトムソ音楽学校に入学し、ヴァイオリンのヴィルトゥオーソとして大賞を得たのに続き、チューヒ音楽院校長のアンドレア・フォルクマー氏に師事し作曲を学んだ後、1927 年にはイタリアに帰国し、生地に住居して作曲、音楽評論などにも活躍した。またヴァイオリニストとしてもヨーロッパの多くの都市や果てはエジプトにまで演奏旅行を行い、各地で成功を収めた。晩年はベルガモ近郊のコヴォに移り住み、1940 年に没した。作品の数は約 160 曲を数え、その多くが管弦樂の為の作品で、当時彼の作品をレパートリーに入れないオーケストラは無い程だったと言われ、オペレッタ『葡萄畑の恋』等は何度もラジオで放送されたい。代表作には小組曲のシリーズを始め、『舞踏組曲』、『アルカディア組曲』、『エジプトの幻影』等、15 の組曲や、2 つの交響的前奏曲、8 曲のオペレッタ等がある。彼の音楽の根幹をなす特徴は『詩的な音楽』であり、半音階的な手法と叙情性の絶妙のバランスは特筆に値するものである。本曲は 1927 年、ポイト音楽院時代の師、イターロ・アッツォーニ教授に感謝を込めて贈られたもので、メリハリに富んだ快活な逸品である。どの楽章にも若さと情熱があふれんばかりに満ちていて、全曲を通して明るいイタリア気質が窺えるが、全楽章のギターには高難度の分散和音が散りばめられておりその奏法には目を見張るものがある。

1983 年 5 月 25 日同志社大学マンドリンクラブ第 102 回定期演奏会(大阪森之宮青少年会館文化ホール)にて本邦初演。

La fille aux cheveux de lin (亜麻色の髪の乙女)

Claude Debussy (クロード・ドビュッシー) 作曲

鈴木 静一 編曲

本曲は、ドビュッシーが1910年に作曲したピアノ曲集、前奏曲集第1巻の第8曲目にあたり、ルコン・ド・リールの詩から題名を取ったものである。情景を彷彿とさせる美しいメロディーはまさに純度の高い音の玉手箱である。

Petite Suite (小組曲)

Claude Debussy (クロード・ドビュッシー) 作曲

小穴 雄一 編曲

作者は(1862~1918)は近代フランス音楽の開拓者であり、1890年代に入って音楽の分野でのいわゆる印象主義を確立した。いわば近代音楽の革命的な作曲家に属し、後進に多くの影響を与えた。『小組曲』は1888年から89年にかけて作曲された現存する最初のピアノ連弾の為の作品である。初演は1889年3月1日にドビュッシーとジャック・デュラン(1865~1928)の連弾で行われた。19世紀フランスでは、ピアノ連弾用(1台のピアノを2人で弾く)の芸術的価値の高い作品はあまり表れなかった。そうしたなかで『小組曲』は空気を一掃した。のちにフランスの指揮者で作曲家のアンリ・ポール・ビュッセルは本曲を2管編成の管弦楽に編曲してこの曲を一段と広く普及させる事になったのも、この曲の価値をビュッセルがいち早く認めただけに他ならない。実際に、ドビュッシーの原曲には、独特な音感覚があり、甘い絵画的な幻想がある。『小組曲』の最初の2曲の題名「小舟にて」「行列」は共にヴェルレーヌの詩集(艶なる宴)の中の詩と同一のものである。本曲の編曲は慶応義塾マンドリンクラブの常任指揮者でありアンサンブルアメデオ(東京)の指揮者、編曲者でもある小穴雄一氏(1957~)が、クリスタルマンドリンアンサンブル(プロマンドリン奏者である青山忠氏が主宰)の為に編曲、1991年3月24日のクリスタルマンドリンアンサンブル第7回定期演奏会にて演奏され大好評を得た。その編曲にはオリジナルピアノ連弾を超えたマンドリンアンサンブルならではの色彩や雰囲気を伴う叙情的な世界を繰り広げる音楽的表現技術の難しさが大いに感じ取れる。

今回の演奏にあたり快く演奏の許可を頂きました事、誌面をお借りし心よりお礼申し上げます。

Prelude 2 (プレリュード2)

吉水 秀徳 作曲

作者は1961年大阪に生まれる。大阪府立四條畷高校のマンドリンクラブを経て、大阪市立大学ギターマンドリンクラブでは指揮者として活躍しながら、自作『2つの動機(モチーフ)』を指揮、発表した。卒業後は京都を本拠とするエルmano・マンドリン・オーケストラで活躍しつつ作曲を行っており、氏の作品はいずれも「わかりやすい構成」「美しい旋律」を備え、中規模の社会人・学生アンサンブルが選曲するにあたって無理の無い編成規模を取るなど、邦人オリジナル作品の様々な可能性の中でひとつの方向性を示したものとして注目を集めている。『序曲』(第5回JMUマンドリン合奏作曲コンクール第3位)『3 dimensions』『EX-trance』『プレリュード3』などがある。

曲は緩-急-緩の3部で構成されている。二長調の単純ながら優しい第1主題、口短調の躍動的な第2主題、そして第1主題の忠実な再現部と、全体的にはシンプルな形式である。

作曲に当っては気楽に演奏できるよう、演奏時間が10分程度の中規模の曲である事、マンドリンオーケストラ本来の6パート編成でオーケストレーションされていること、現代的な響きを含みながらもわかりやすさを伴っていることが目指されている。1989年夏に作曲、同年9月に作曲者の母校である大阪府立四條畷高校によって初演された。

組曲『^{サハリ}樺太の旅より』

鈴木 静一 作曲

作者は1901年3月16日、東京生まれ。中学の音楽教師であった吉沢氏に作曲・和声を師事、A.サルコリの元でギターやマンドリンを弾き始める。1923年、イタリアからカラーチェ来日。マンドリン奏法について助言を受ける。1924年、イタリアに渡る。途中シベリウスに会う。作曲の才能を認められ作曲活動を開始。1927年、東京マンドリン協会が創設され指揮者となり、オルケスタ・シンフォニカ・タケイ 主催の第1回作曲コンクールに『空』が2位入賞した。1936年、日本ビクター入社と共にマンドリン界から一時身を遠ざけた。以後1965年に復帰するまでの間に、約450曲に及ぶ映画音楽や、流行歌の作曲を手掛ける。戦前の映画音楽作品では黒澤明監督『姿三四郎』やポピュラーな作品では“たんたんたぬきの〜”という替え歌で歌われている『煙草屋の娘』が有名。1965年、旧友であった小池正夫氏の死をきっかけに復帰。1980年5月、民謡のふるさと『遠野郷』を発表。これが遺作曲となる。

1980年5月27日、永眠。同年9月8日、日本青年館にて鈴木静一先生を偲ぶ追悼演奏会が開かれたが、映画監督の黒澤明氏から以下のようなメッセージが寄せられた。「私は鈴木静一氏に、私の第一回作品『姿三四郎』の映画音楽を担当していただきました。そしてその音楽は大変印象的なもので、今でもそのメロディーははっきり記憶しております。特に三四郎のテーマと、“向こうへ来るのは三四郎…”という童唄のメロディーは、当時映画を見た人達の耳に未永く残っていたようです。『姿三四郎』以後、私と鈴木氏との関係は切れて今日に至った訳ですが、只今彼の訃報を聞き、(姿三四郎)当時の氏の面影を思い浮かべて感慨深いものがあります。」本曲は、1930年の基本スケッチを基に1966年の秋から改訂を行い、1967年9月アンサンブル・プレットロにて初演。

福岡シンフォニックマンドリンアンサンブルとしては、第21回定期演奏会(1989.11.11)以来の再演である。
(作者記)今、サハリンと呼ばれソ連の領土となっているが、大戦以前この島の南半は樺太と呼ばれ、日本の領土であった。自身そこを訪れたのは昭和10年以前であった。

- 1 **白い曠野**～私はトナカイの牽く橇にゆられ、シスカから日ソ国境に向かった。季節は5月になろうとしているのに、まっ白の雪原がひろがり、その下は一面のツンドラ地帯だという。白い曠野は雄大と同時に極度に荒冷が漲っている。トナカイ一りっぱな角を持ち精かんな印象を与えるこの動物の走行は意外にのんびりしていた。しかし、何とも異国的な感じにあふれる動物で、思わずロシア民謡「走れトロイカ」のメロディを口ずさむ。
- 2 **古い軍服を着たギリヤク人**～この旅のガイドはギリヤク人だった。エスキモーに似た顔だち。古いロシア時代の軍服にストウをはいている。ストウはスキーの一種で昇りには強いが、下りには弱く、よく尻餅をつく。ただ平地だけはボロボロの軍服の胸を張り堂々の行進。そして又尻餅！
- 3 **国境にて**～国境に近いホロミ峠の駅停(旅館)に着いた翌日、スキーで国境に行った。石標と一本の木標が僅かに国境をしめしているだけ。山火事で立ち枯れた木々が景観を冷酷にしている。北の果北緯50度まで来た実感が湧き、同時に郷愁が胸を打つ。前夜、駅停の老人から前年この国境を超え密出国をした若い男女の話聞いた。昔、ロシアではこの島を悪魔の島と呼び、重罪人の流刑地だったと聞いた。季節は知らない。若い二人はどんな気持ちでこの冷酷の山野を越えて行ったのであろう。(この女性は、最近ソ連から帰郷した当時の映画スター岡田嘉子であった)
- 4 **犬橇**～帰りは、樺太犬が20匹ほどの軽そうな橇を牽いて迎えに来た。国境から南下する軍用道路をとばす犬橇は快適だったが、途中で休ませると犬どもは雪の上に腹這い、全部が舌を出してあえいでいた。空腹なのだ。ロシアパンの残りをやろうとするとギリヤク人が慌々おし停どめる。犬どもは満腹すると走らないと言うのだ。口笛とかけ声が飛び、腹の空いた犬どもは、餌料の待っている終着駅に向かい一散に走る。かなたに未だ流水が一面に漂っている海が見えて来る。

クロード・ドビュッシー (Claude Achille Debussy 1862 ~1918) の肖像

19世紀末期に、フランスに象徴主義文学や、印象主義美術が盛んになり、影響を受けたドビュッシーは、音楽にこのアイデアを採り入れて、印象派音楽を樹立した。印象主義 (Impressionism) この言葉はフランスの絵画運動の用語であった。即ち、マネ、モネらの外光派に与えられたもので、1860~82年頃に現われた絵画技法である。印象とは外界の模写でなく、一度心情に刺戟を与えた内的的印象を、主観的に表現するものである。これはミレーやコロアの写実派への反抗で、固有色を、プリズムの原色を主体とした色調の配合によって、色感的にボリュームを得ようというものであった。

従来の音楽は、一定の調性のもとに、主題の発展と、その解決終止が中心となる構造を持ち、その発展も、おのずから機能的転調を伴って、水平線的に構成されていた。従って、その鑑賞も、合理的な完成に向けられたが、印象派音楽では、構成の理智的探究よりも、直観的雰囲気に入力することが、至上条件であり、したがって、官能的な音感覚に、直接に訴えることが要求された。

その結果として、次のように、あらゆる面で従来の理論が破壊された。ドビュッシーは1862年、8月22日。パリ郊外のサン=ジェルマン=アンレの雑貨商の子として生れた。幼少時代のことは、よく知られていないが、蝶の採集などをして自然に親しんでいたという。7歳の時、はじめてピアノを学び、1871年から3年間、かつてショパンの門下と自称するモーテ・ド・フルールヴィユ夫人 (詩人ヴェルレーヌの義母) について本格的レッスンを受け1872年10月、パリ国立音楽院に入学することができた。パリの修業中のドビュッシーは、経済的に恵まれなかった。チャイコフスキーの後援者であったフォン・メック夫人の子供家庭教師となり、1880、1881の2年間、その家族とスイス、イタリア、ロシアまでも旅行することができた。1882年ウィーンで初めてワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』を聴いたらしい。その後音楽教師の伴奏を手伝い、その収入で書籍や絵を購入し、教養の補強に努めた。1888、1889年には、パイロイトで『パルジファル』『トリスタン』を聴き、その自由奔放な和声法にうたれ、ロシア旅行ではムソルグスキーの『ボリス』で音楽には法則というものが存立しない、耳だけがその審判者であることを知った。さらに彼の創作意欲を誘ったものは、1889年のパリ万国博覧会であり、極東からの音楽舞踊団 (日本からは川上貞奴、音二郎一座が参加) の、異国的音楽に深く感動した。東洋的簡素幽玄な表現に、ヨーロッパ的な機能和声、管弦楽法の過重、導旋律の不合理をさと、ヴァグナーを抹殺して、新しい音楽美の創造を決意した。ドビュッシーの旋律の中に、日本の旋律の断片がのぞいたり、六全音階の意想 (ほぼ七平均律に近い半音をもたない音階) はタイ国のものであり、ジャワのガムランの影響をも見せ、日本の笙の四度和声なども、この時に得たものであろう。その後パリに居をすえて、ヴェルレーヌの詩による『三つの旋律』 (海は美し、角笛の音はかなし、垣のならび) (1891)そしてマラルメの詩による『牧神の午後への前奏曲』 (1894) を世に出した。歌劇においてはベルギーの文豪、メーテルリンクの『ペレアスとメリザンド』に取り組んだ。1899年、ロザリー・リリーと結婚した。やがて『ペレアス』が完成し、1902年4月30日、メッサージェ指揮によって、パリ、オペラコックで初演された。この歌劇は、ヴァグナー以後の、20世紀の最大傑作といわれた。1903年、フランス政府はレジョン・ドヌール勲章を授け、その名誉をたたえた。翌年、離婚。銀行家の妻であったエンマ夫人と恋に陥ち、1905年結婚した。彼女は美しい、しかも富裕な声楽家であった。この年エンマに子供が出来たので、その喜びから、ピアノ曲『子供の領分』を作った。その後、多くのピアノ曲、歌曲、その他を作曲したが、1909年頃から、癌 (がん) の症状が表われ、それに1914年、第一次世界大戦には心労が多く、愛国の至情を二台のピアノの為の『白と黒で』 (1915) 『家なき児らのクリスマス』 (1915) を作って寄せていたがその後、戦争悪化の中に1918年3月25日、パリに永眠した。



Claude Achille Debussy